

マイ・ボディガード (MAN ON FIRE)

2004(平成16)年12月19日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督=トニー・スコット/出演=デンゼル・ワシントン/ダコタ・ファニング/クリストファー・ウォーケン/ジャンカルロ・ジャンニーニ/ラダ・ミッチェル/マーク・アンソニー/レイチェル・ティコティン/ミッキー・ローク (松竹配給/2004年アメリカ映画/146分)

……前宣伝と予告編を観ただけで「これは観なければ」と思えるタイトルと俳優陣。前半の「友情物語」から一転して、後半の「復讐劇」は生々しいもので、R-15指定も十分納得！「誘拐大国」メキシコを舞台にくり広げられる誘拐事件の追及は、予想を越えたスリリングなもので、2時間26分という時間を感じさせない展開はお見事！そしてあっと驚く結末は……？

テーマは誘拐！

誘拐をテーマとした映画はたくさんあるが、最近の傑作は、本作と同じく、美少女ダコタ・ファニングが誘拐される『コール』(02年)。これには『モンスター』(03年)でアカデミー賞最優秀主演女優賞を射止めた、今をときめくシャーリーズ・セロンも出演していた(『シネマルーム4』96頁参照)。他方、日本では面白いものとして既にシリーズものとなっている『完全なる飼育』がある。私が観たのはその第4作にあたる「秘密の地下室」というサブタイトルがついたもので、R-15指定ながら決してポルノ映画ではなく、非常に面白い(?)もの(『シネマルーム3』362頁参照)。もちろん、誘拐罪とくに未成年者の誘拐・監禁が重大な犯罪であることは、どの国でも同じ。

殺人事件をテーマとした映画が多いのと同様に誘拐をテーマとした映画が多いのは、現実におこる問題を避けて通ることができないため。そしてまた、このような重大犯罪の中に、さまざまな人間の根源的な本質が見えてくるため。ホントは、そんな映画をつくることに興味がなくなれば、何ごとにも平穏な社会なのだろうが、そうはいかないのが人間というもの。したがって、今後も誘拐をテーマ

とした映画が次々と作られていくことだろう……？

誘拐大国はコワイ！

前述の『コール』はアメリカ国内での誘拐事件であるうえ、30分毎の携帯によるコールによって誰も傷つけず、完璧に身代金目的の誘拐を完成させることがテーマだったが、それはハリウッド映画が考えた「空想的」で「理想的」な誘拐スタイル。しかし現実はそのような甘いものではない。パンフレットによると、「誘拐大国」という不名誉な冠をつけられている国メキシコでは、誘拐事件世界一の国コロンビア（年間1000件）に次いで、警察に通報されるものだけでも年平均530～550件の誘拐事件が発生しているとのこと。なお、3番手以下は、ブラジル、フィリピン、旧ソ連、ベネズエラ、インドと続くとのこと。これらの国に比べれば日本社会は平和なもの。しかし日本では誘拐事件はまだまだ少ないものの、治安が少しずつ悪化している現状に照らせばこれからはヤバイかも……？

主人公のキャラクターは？

この映画を観るについてまずおさえておくべきは、主人公ジョン・クリーシー（デンゼル・ワシントン）のキャラクター。詳しいことは別として、米軍の対テロ部隊で「暗殺」の仕事を16年間も続けていたため、その傷で彼の心と身体はボロボロになり、酒びたりの日々というのが今のクリーシーのキャラ。そしてこれは、あたかもあの『ラストサムライ』（03年）でトム・クルーズが演じたオールグレン大尉と同じようなものだ。すなわち彼は、西部開拓史の時代には原住民たちと戦い、また1861～65年の南北戦争でも大活躍した英雄だったが、戦争が終わり、軍人が無用の長物となり、かつての「名誉」や「勇気」が行き場を失った状態のもとでは、果たすべき役割が与えられず、失意の中で酒にあけくれる毎日を送っていたのだった。こんなオールグレン大尉は、明治政府の軍事顧問（アドバイザー）として新たな人生が開けたが、クリーシーにはボディガードという仕事しか……。『ラストサムライ』におけるオールグレン大尉は熱意をもって未知の国、ニッポンへ渡ったが、クリーシーにはこのボディガードの仕事への新たな生き甲斐などは存在しない。雇う側のサムエル・ラモス（マーク・アンソニー）も、

保険の更新のためにはボディガードを雇うことが必要なため、とりあえず安月給ですむ未経験者のボディガードを雇い、役に立たなければそれなりの理由をつけてクビを切ればいいという安易な発想でクリーシーを雇うことに。したがって、初日サムエルの家を訪れたクリーシーが、サムエルの美しい妻リサ・ラモス（ラダ・ミッチェル）から、「お茶でも？」と声をかけられたことに対する答えは、「バーボンを！」というもの。こんな飲んだくれ（？）のボディガードでホントに役に立つのかな……？

お仕事の開始！

サムエルはメキシコ人だが、その妻のリサはアメリカ人。したがってサムエルはともかく、リサがクリーシーを最愛の娘ピタ・ラモス（ダコタ・ファニング）のボディガードとして採用すると決めた最大の動機は、クリーシーがアメリカ人であり、ピタが英語で話ができるということだった。人間の本性を瞬間的に見抜く能力を持った子供の目には、無口なクリーシーは悲しげな熊に見えたとのこと。そんなクリーシーを、ピタは車で学校への送り迎えの最中に質問攻めにするが、クリーシーにとってはそれは迷惑なこと。

毎晩バーボンを飲まなければ、昔の古いキズから開放されず眠れないクリーシーにとっては、既に「笑い」は縁のないものだったし、自分の心の中に入り込もうとするものをすべて拒否しようとしたのは当然のことだった。クリーシーはピタに対して「質問は終わり！」とはねつけ、ボディガードとしての仕事にのみ集中すると宣言したが……。

アカデミー賞の大俳優と天才子役との心の交流—心暖まる前半のストーリー

『アイ・アム・サム (I am Sam)』(01年)で各種の映画賞を受賞し、天才子役の名をほしいままにしてきた、1994年生まれの美少女ダコタ・ファニングは、この映画でも天才的な演技を見せている。クリーシーを質問攻めにするピタや、それをクリーシーにはねつけられてしょげかえるピタの姿などは、まさにその面目躍如たるもの。そしてまた、ラストでの演技は圧巻！（オット、これはこれ以上書いてはダメ！……）

アカデミー賞の大俳優デンゼル・ワシントンと天才子役のダコタ・ファニングとの心の交流が始まるのは、水泳大会に向けての特訓から。何ごとにも一生懸命に取り組むことしか知らないクリーシーは、プロとして取り組んだ昔の仕事と同じような熱心さで、ピタに対して水泳の特訓をした。ピタも今時の子供には珍しく、歯を食いしばりながらそれについていった。その結果は……？

2004年12月7日付の新聞各社によれば、日本の子供の教育水準は近時著しく低下しており、特に読解力は41カ国の中で14位（前は8位）に後退していることが報道された。その直後各紙は社説でもその問題点を取り上げているが、これは「ゆとり教育」がもたらした大きな弊害であることは明らか！「落ちこぼれを発生させないため」という理由ですべての教育レベルを下げたうえ、競争までなくしてしまったのでは、人並み以上に無理をして頑張ってトップに立ったときの喜びなど、わかるはずがなくなるのは当然。

「私は3位にしかねないの！」と言っていたピタが、1位になれたのはなぜか？ それは、人一倍努力したことによるもの。そんな単純なことを教え学ぶ中で、2人の間に心の交流が芽生え深まっていったのは当然だろう。そしてそれは、ピタの勉強の面においても……。これこそが家庭教育のあるべき姿であることは明らか！

誘拐事件をテーマとしているはずのこの映画の前半は、その危険の気配を示すだけで、クリーシーとピタとの心暖まるストーリーが連続する。それによってクリーシーは完全に「笑い」を取り戻したうえ、隠していたバーボンに手がいくこともなくなり、昔はいつも読んでいた聖書のページを開くことも。このままいけばハッピーそのものだが、それではこの映画は成り立たない……？

中盤のハイライトシーンは？

映画の中盤に登場するハイライトシーンが、ピタの誘拐事件。これは一体誰が、何を狙ったもの？ そして制服の警察官2人がなぜその現場に？ また、なぜクリーシーは重傷を負ったのか、そして、その後クリーシーはどのように扱われるのか？ 謎だらけのこの誘拐シーンは、その後の「あっと驚く」後半のストーリーの土台となるものだ。

ガラリと変わる後半のストーリー！

この映画はもちろん全体として1つのストーリーを構成しているが、あたかも前編と後編があり、両者で全く異なるテーマを描いているかのよう。前半とはガラリと変わり、後半のストーリーはほとんどクリーシーの一人舞台。16年間も対テロ部隊で殺人のプロとして働いていたクリーシーが本気になって、誘拐によって殺された(?)ピタの復讐のために生命をかけて立ち上がったのだから、そりゃ大変！ 誘拐を仕組み、それによって利益を得ていた関係者たちを次々と暴き出し、それに対して復讐していく後半のストーリーでのクリーシーの姿は、ある意味ではひどく非人間的で残忍なもの。具体的にスクリーン上にその残忍な復讐の姿(手口)が登場すると、観客からは思わず「エッ！」という声も……。この映画がなぜR-15と指定されていたのかが、その時点でよくわかる。この評論では、この誘拐事件に絡む犯人や関係者たちのタネ明かしをすることはできないが、そのストーリーはかなり複雑で難解。後半に登場する新聞記者の女性マリアナ・ゲレロ(レイチェル・ティコティン)が節目節目で情報提供をしてくれるため、誘拐事件のあらすじは理解できるものの、その全貌のシステムをきちんと把握することはかなり難しいはず。後半はそのつもりで心して観る必要がある。

メキシコの誘拐事件の特徴は？

パンフレットにある山崎正晴氏の「誘拐大国 メキシコが抱える『心の深い闇』」の解説によると、①「コロンビアの誘拐の多くが左翼ゲリラ集団によって行われているのに対し、メキシコでは都市型の犯罪者集団によって行われている」とのこと。そして②「誘拐の実行犯の多くは17歳から25歳までの教育レベルの低い若者達であるが、誘拐組織の多くが現職もしくは元警官をメンバーとして抱えている」とのこと。さらに③「警察官に加えて、メキシコでは政治家も誘拐に関与している」うえ、④「より悲惨なのは、メキシコ市でここ数年間に報告された誘拐事件の内、少なくとも5%に被害者の家族の関与が推定されるという事実である」とのこと。これってホンマかいな……？

上記①がホントらしいことは、メグ・ライアンとラッセル・クロウが共演した

『プルーフ・オブ・ライフ』(00年)を観ていた私にはよくわかる(『シネマルーム1』6頁参照)。つまり、政権と対立している左翼ゲリラにとって人質は重要な「お宝」だから、これを殺害してしまったのでは全く無意味で、取引を成立させることが最重要テーマなのだ。そこで生まれたのが、国際的な誘拐身代金犯罪から顧客を守るための会社。さらに、いざコトが起こった場合、被害者の代理人として犯人グループと交渉する「人質交渉人」という職業まで生まれている。『プルーフ・オブ・ライフ』は、このゲリラ集団との交渉に命がけて挑む人質交渉人を主役として登場させた愛と感動の物語だった。

それに比べると、上記②③④の特徴をもったメキシコで多発する誘拐事件は、ちょっと信じられないほど悪質なもの。もっとも、誘拐に備えるための保険商品が販売され、その更新のためにはボディガードを雇っていることが必要だという、この映画の物語の基礎は本当の話なのだろうから、きっとこの②③④も本当なのだろう。しかし、この映画で展開される誘拐事件の真相は……？

原作と原題は？

パンフレットによると、この映画の原作は、A.J. クイネルが書いた小説『燃える男』(集英社文庫)で、主人公の名前はこの映画と同じクリーシーとのこと。そして、舞台や登場人物は違っても、その骨格は共通のものらしい。私が驚いたのは、この原作はその後「クリーシー・シリーズ」となって次々と作品が生まれ、不死鳥のクリーシーは近くシリーズ第5作にも登場することになっていること。

この映画の邦題の『マイ・ボディガード』は、いかにもこの映画の内容にピッタリしたいいネーミングだが、原題は原作と同じ「MAN ON FIRE」。「マイ・ボディガード」では第2作、第3作は作りにくいかもしれないが、「MAN ON FIRE」ならいくらかでもシリーズ化が可能だろう。したがって、シリーズもの大はやりのハリウッドでは、ひょっとしたらこの『マイ・ボディガード』も第2作が企画されるかもしれない。そうすると、不穏な予想ながら、次の誘拐の舞台はどこだろうか？ ひょっとして混乱の続くロシアやイラク、それとも2008年開催の北京オリンピックを見込んで、意外に中国かも？ まあ、日本はないだろうナ……？

2004(平成16)年12月20日記